

る。クッキーを焼くと生地の中に気泡ができ、多孔質となる。クッキー生地の中の気泡の状態を、生焼けの状態から、十分焼き上がった状態までそれぞれ断面を見ていくと、まず表面に平行に細長い気泡が現れ、次第に気泡の厚みが増し、さらに焙焼が進むと、細長い気泡は縦方向につながって長い気泡となり、これが膨張して大きな気泡となる。落雁の多孔質構造はクッキーとは成因がまったく異なり、米の粉と砂糖の粒子が圧縮されて、残った隙間によるものである。これを三十五倍の電子顕微鏡で見ると、米の粉と砂糖粒子の間に橋がかかっている。落雁を作るときに、砂糖蜜（しとり）を少し加えて揉む作業があるが、この作業の間に粒子同士に液体の砂糖蜜で橋がかかり、これがそのままの形で乾燥して落雁が出来ることが分かる。砂糖蜜による橋のかかり方が落雁の品質を決めるものであり、菓子職人の修行の一つは、必要にして十分な橋をかけることにあるといえる。

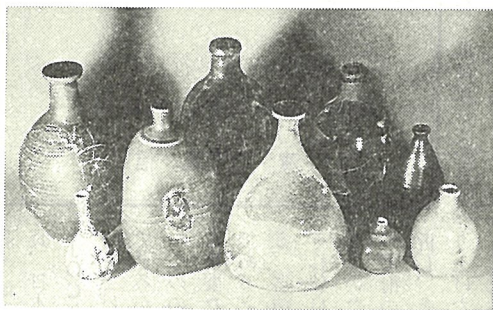
日本人は物のかたちにこだわる民族であるが、物のかたちも追求していくと、また新しい学問の世界が開けるものである。

（女子大学教授）

同志社校地出土の埋蔵文化財(4)

「多様な徳利類」

鈴木 重治



（安土・桃山～江戸時代）
（左下の古伊万里高さ 13.5 cm）

公家屋敷や寺院の境内であった今出川キャンパスからは、多量の徳利が出土している。多種多様な徳利を観察していると、生産地による形態の差以上に、時代による製作技法の差や伝統的な技法の継承が生産地によって違うことがわかる。

ここに示した信楽（前列右端）、丹波（後列右三個）、備前（前列中央三個）などの中世六古窯系の資料と、肥前の古伊万里（前列左手前）、唐津の徳利をみても、時代差、技法の違いなどが形態上の特徴とともに指摘される。

中央手前の備前の船徳利の形態は、中世以来の伝統的なものであるが、口縁部の立ち上りを盤状に造り出していることは、良く時代の特徴を示していて、左隣りの布袋徳利の貼り付装飾とともに備前焼の新取性をうかがわせている。

信楽焼にみるきめのこまかい胎土に長石粒を含むものと、丹波焼の露胎部（釉のからない部分）でみる胎土の差も大きい。信楽の土が古琵琶湖の湖底堆積物を主体としているのに対して、丹波の土が田土と山土の割合によっているからである。

唐津の鉄釉にも、赤味のあるはだとともに個性が見出せる。古伊万里の磁質のはだは、単にその白さのみで魅せられることはない。

（大学校地学術調査委員会調査主任）